

## 小学校の「クラブ活動」における指導の実態

### The State of Instruction in Club Activities in Elementary Schools

宇田 響<sup>\*1</sup>・実森 有紀<sup>\*2</sup>

Hibiki UDA Yuki SANEMORI

#### Abstract

This study examined the state of instruction in club activities based on a questionnaire survey conducted with elementary school teachers. The analysis yielded five major findings. First, club activities in elementary schools have ideal characteristics (i.e., they are planned based on students' affinities and interests and carried out with students from other grades while having fun). However, there is also room for improvement regarding children's planning and the implementation of activities. Second, it became clear that while a relatively large number of schools have a mechanism for children to establish new clubs, many schools do not have such a system. Third, regarding the planning and implementation of club activities, a relatively large number of schools have an annual activity plan formulated by the children or a time for reflection set at the end of each activity, although several schools lack this. Fourth, many schools do not let students present the results of their club activities. Fifth, regarding difficulties in teaching club activities, respondents reported that the number of club activities held per year is small, the burden of preparing for club activities is heavy, and it is difficult for teachers to teach club activities in which they lack expertise.

#### 1. 問題の所在

2017年改訂の小学校学習指導要領によれば、特別活動は「学級活動」「児童会活動」「クラブ活動」「学校行事」の4つの内容で構成されている。特別活動では、これら4つの内容を通して、「多様な他者と協働する様々な集団活動の意義や活動を行う上で必要となることについて理解し、行動の仕方を身に付けるようにする」「集団や自己の生活、人間関係の課題を見いだし、解決するために話し合い、合意形成を図ったり、意思決定したりすることができるようにする」「自主的、実践的な集団活動を通して身に付けたことを生かして、集団や社会における生活及び人間関係をよりよく形成するとともに、自己の生き方についての考えを深め、自己実現を図ろうとする態度を養う」(文部科学省 2018a, 183頁)といった資質・能力を育成することが目指されている。なお、『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 特別活動編』(文部科学省 2018b)では、このような資質・能力を育成するために、各内容で育成すべき資質・能力の例示もなされており、それをふまえた実践を行うよう求められていることには留意しておく必要がある<sup>1)</sup>。

本稿では先述した特別活動の4つの内容のうち、「クラブ活動」に着目したい。というのも、クラブ活動は他の内容と同様、特別活動全体で掲げられている資質・能力を育成する上で重要な内容であるのにも関わらず、これまで十分な検討がなされてこなかったからである。実際、現代の小学校において、クラブの特質をふまえた活動(児童が皆で考え、計画を立てる活動、児童の好きなことや興味のあることを楽しむ活動など)が展開されているのか、活動に取り組んだ成果を発表する機会が設けられているのかなどの実態すら把握がなされていないのである<sup>2)</sup>。もちろん、文部科学省(2023)の「令和4年度公立小・中学校等における教育課程の編成・実施状況調査」より、クラブ活動の年間授業時数の現状については把握することができる。しかしながら、そうした調査によって得られた知見だけでは、クラブ活動における指導の実態を十分に描き出すことは難しい状況にある。

<sup>\*1</sup> くらしき作陽大学子ども教育学部、助教 (Kurashiki Sakuyo University, Faculty of Childhood Education, Assistant Professor)

<sup>\*2</sup> くらしき作陽大学子ども教育学部、学部生 (Kurashiki Sakuyo University, Faculty of Childhood Education, Undergraduate student)

そこで本稿では、小学校教員を対象として実施したアンケート調査に基づき、クラブ活動における指導の実態を明らかにする。そうした検討によって得られた知見をふまえ、クラブ活動の指導のあり方を考察することとしたい。

## 2. 研究の方法

アンケート調査は、2023年8月下旬に、オンライン調査サービス Freeasy に登録しているモニターを対象に行った。具体的な手順としては、小学校教員を抽出することを目的としたスクリーニング調査を行った上で、小学校教諭（指導教諭・講師を含む）を対象とした主調査（「小学校のクラブ活動の実態に関する調査」）を行った。主調査の項目には、クラブ活動における指導の実態を尋ねるものだけでなく、クラブ活動のあり方に対する認識を尋ねるものも含まれている。なお、調査の目的や方法、データの取り扱い方法などについての説明文を記載した上で、調査への同意ができる者のみに回答を依頼していることを記しておきたい。

有効回答票数は、小学校教諭（指導教諭・講師を含む）230名であり、回答票数に占める有効回答票数の割合は、93.9%となっている（詳細は表1を参照）。本稿の分析で用いるサンプルは、小学校教諭（指導教諭・講師を含む）230名のうち、今年度クラブ活動の指導を担当している186名である。以降の分析では、これらのサンプルを用いて、クラブ活動における指導の実態を明らかにすることとしたい。

表1 調査の概要

有効回答票数	回答票数	割合（有効回答票数／回答票数）
230名	245名	93.9%
性別		
男性（割合）	女性（割合）	/
107名（46.5%）	123名（53.5%）	
年齢		
20代（割合）	30代（割合）	40代（割合）
32名（13.9%）	63名（27.4%）	56名（24.3%）
50代（割合）	60代（割合）	/
47名（20.4%）	32名（13.9%）	

注：括弧内の％は、有効回答票数の内、性別／年齢についての回答があった者に占める割合。

## 3. クラブ活動における指導の実態

本章では、クラブ活動における指導の実態についての検討を行いたい。具体的には、年間どの程度実施されているのか、クラブの特質をふまえた活動が展開されているのか、さらには、成果を発表する機会は設けられているのかなどについての検討を行うこととしたい。

それでは、クラブ活動が年間どの程度実施されているのかをみていきたい。図1は、「クラブ活動は、年間何回（年間授業時数）実施されていますか？」という項目について、回答者に実数で尋ね、カテゴリ化（～5回、6～10回、11～15回、16～20回、21回～）した結果を示したものである。結果をみると、「6～10回」の割合が72.0%、「11～15回」の割合が15.1%となっており、それらを合わせると87.1%と大半を占めていることが確認できる。こうした結果からは、クラブ活動を月1回程度実施している学校が多いことが読み取れる<sup>3)</sup>。なお、「～5回」の割合は5.9%となっており、月1回程度の実施ができていない学校もあることには留意しておく必要があるだろう。

参考までに、教員がどの程度実施することが必要だと考えているのかもみておきたい。図2は、「あなたは小学校において、クラブ活動は年間どの程度必要だと思いますか？」という項目について、回答者に実数で尋ね、カテゴリ化（～5回、6～10回、11～15回、16～20回、21回～）した結果を示し

たものである。結果をみると、「6～10回」の割合が61.8%、「11～15回」の割合が17.2%となっており、それらを合わせると79.0%と大半を占めていることが確認できる。こうした結果と先に取り上げた図1の結果を比べると、実際の実施回数と教員が理想とする実施回数との間には、少し乖離があると考えられる<sup>4)</sup>。

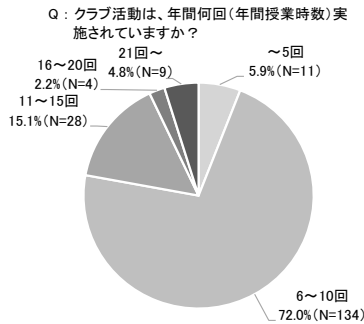


図1 現在の年間授業時数

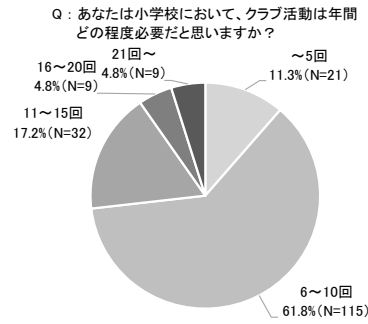


図2 理想とする年間授業時数

前提として、クラブ活動は児童が好きなことや興味のあることを念頭に計画を立て、異学年の児童とも協力し楽しみながら行うものである。以下では、そうした特質をふまえた活動が展開されているのかをみていきたい。

図3(左)は、「クラブ活動は、児童が「皆で考え、計画を立てる活動」となっていますか?」という項目について、回答者に選択肢(そう思う、ややそう思う、あまりそう思わない、そう思わない)を設け、尋ねた結果を示したものである。結果をみると、肯定的な回答(「そう思う」と「ややそう思う」を合わせた回答、以下同様)の割合が73.7%となっているのに対し、否定的な回答(「あまりそう思わない」と「そう思わない」を合わせた回答、以下同様)の割合は26.4%となっていることが確認できる。こうした結果からは、児童が自ら考え計画を立てる活動が多く为学校で展開されていることが読み取れる。

図3(中)は、「クラブ活動は、「好きなことや興味のあることを楽しむ活動」となっていますか?」という項目について、回答者に選択肢(そう思う、ややそう思う、あまりそう思わない、そう思わない)を設け、尋ねた結果を示したものである。結果をみると、肯定的な回答の割合が89.2%となっているのに対し、否定的な回答の割合は10.8%となっていることが確認できる。こうした結果からは、児童が楽しめるような活動が多く为学校で展開されていることが読み取れる。

図3(右)は、「クラブ活動は、「異学年の児童と協力するような活動」となっていますか?」という項目について、回答者に選択肢(そう思う、ややそう思う、あまりそう思わない、そう思わない)を設け、尋ねた結果を示したものである。結果をみると、肯定的な回答の割合が88.2%となっている

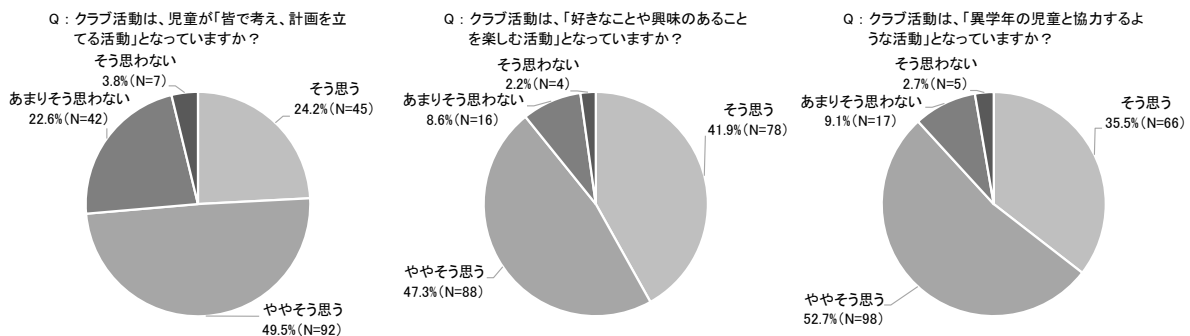


図3 クラブ活動の特質に関する認識

のに対し、否定的な回答の割合は 11.8%となっていることが確認できる。こうした結果からは、異学年の児童と協力した活動が多く为学校で展開されていることが読み取れる。

以上のように、多くの小学校ではクラブの特質をふまえた活動が展開されているようである。ただし、図 3 のそれぞれのグラフを比べると、図 3 (左) の肯定的な回答の割合は、図 3 (中) や図 3 (右) のそれよりも相対的に低くなっている。このことは、クラブの特質の中でも、児童が計画を立てて活動を行うという面で向上の余地があることを示しており、今後のクラブ活動における指導のあり方を考えていく際に意識しておくべきことだと考えられる。

また、クラブ活動が児童にとって「好きなことや興味のあることを楽しむ活動」であるためには、例えばクラブを設置する際、児童の希望を反映する仕組みや児童が各クラブの具体的な活動内容を知る機会があることは必要だろう。以下では、そうした仕組みや機会があるのかをみていきたい。

図 4 は、「児童が新たなクラブの設置を提案することができる仕組みはありますか?」という項目について、回答者に選択肢（仕組みがある、仕組みはない）を設け、尋ねた結果を示したものである。結果をみると、「仕組みがある」の割合が 64.5%となっているのに対し、「仕組みはない」の割合は 35.5%となっていることが確認できる。こうした結果からは、児童が新たなクラブの設置を提案する仕組みがある学校が比較的多いことが読み取れる。ただし、仕組みがない学校も一定数存在していることには留意しておく必要があるだろう。なぜなら、そうした学校では、児童の希望を反映したクラブの設置が行われていない可能性があるため、児童の中には希望に沿わないクラブに所属する者もいるかもしれないからである。

図 5 は、「クラブ活動の希望調査を行う前に、具体的な活動の紹介や見学は実施していますか?」という項目について、回答者に選択肢（実施している、実施していない）を設け、尋ねた結果を示したものである。結果をみると、「実施している」の割合が 88.2%となっているのに対し、「実施していない」の割合は 11.8%となっていることが確認できる。こうした結果からは、クラブ活動の具体的な活動の紹介や見学を実施している学校が多いことが読み取れる。

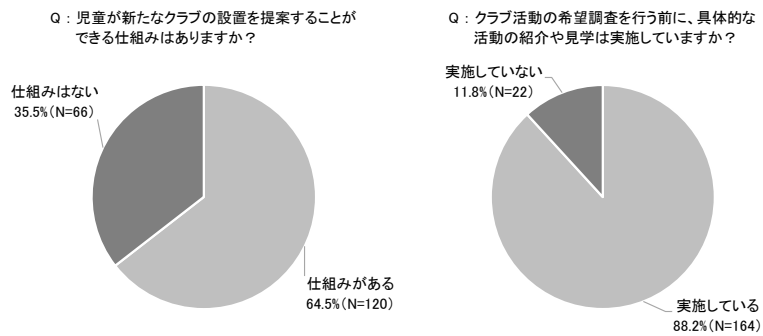


図 4 設置を提案する仕組みの有無 図 5 紹介・見学の実施状況

児童のクラブ活動における「学び」を深めるためにも、児童主体で活動計画・内容を決めたり、活動終わりに、振り返りの時間を設けたりすることは重要である。以下では、そうした活動が展開されているのかをみていきたい。

図 6 (左) は、「クラブ活動を行う上で、年度当初に「年間活動計画」を所属する児童で立てていますか?」という項目について、回答者に選択肢（立てている、立てていない）を設け、尋ねた結果を示したものである。結果をみると、「立てている」の割合が 69.9%となっているのに対し、「立てていない」の割合は 30.1%となっていることが確認できる。こうした結果からは、児童主体で年間活動計画を立てている学校が多いことが読み取れる。ただし、立てていない学校も一定数存在していることには留意しておく必要があるだろう。なぜなら、そうした学校に所属する児童は、活動の見通しをつけることができないだけでなく、目標をもって活動することが難しい状況にあると考えられるか

らである。

図6(中)は、「毎回の活動の具体的な内容を、児童が話し合って決める時間を設けていますか?」という項目について、回答者に選択肢(毎回設けている、時々設けている、設けていない)を設け、尋ねた結果を示したものである。結果をみると、「毎回設けている」の割合が35.5%、「時々設けている」の割合が46.8%となっているのに対し、「設けていない」の割合は17.7%となっていることが確認できる。こうした結果からは、頻度はさておき、毎回の活動の具体的な内容を児童主体で決める時間を設けている学校が多いことが読み取れる。

図6(右)は、「毎回の活動終わりに、振り返りの時間を設けていますか?」という項目について、回答者に選択肢(設けている、設けていない)を設け、尋ねた結果を示したものである。結果をみると、「設けている」の割合が70.4%となっているのに対し、「設けていない」の割合は29.6%となっていることが確認できる。こうした結果からは、毎回の活動終わりに、振り返りの時間を設けている学校が多いことが読み取れる。ただし、設けていない学校も一定数存在していることには留意しておく必要があるだろう。なぜなら、そうした学校に所属する児童は、その日の活動の「学び」を整理することができていないため、次の活動においてどのようなことを意識し取り組む必要があるのかを認識できていない可能性があるからである。

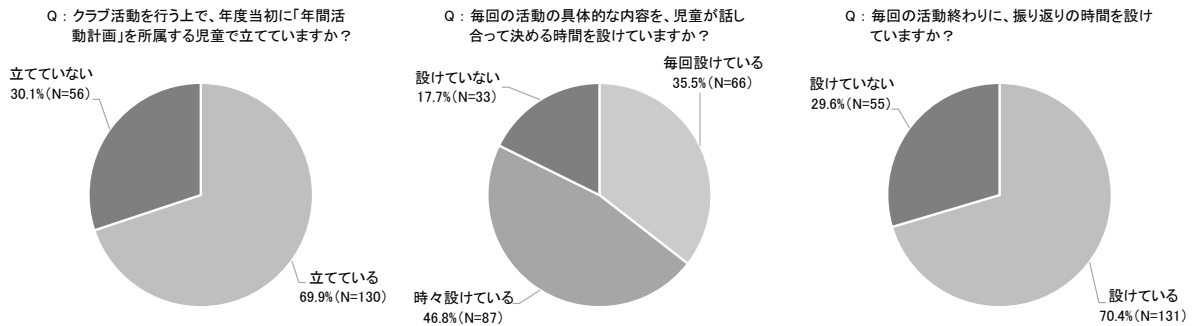


図6 クラブ活動の実施計画・実施状況

児童のクラブ活動における「学び」を深めるためには、児童が活動に取り組んだ成果を発表する機会があることも重要だろう。以下では、そうした機会があるのかをみていきたい。図7は、「クラブ活動の成果を発表する機会を学校として設けていますか?」という項目について、回答者に選択肢(設けている、設けていない)を設け、尋ねた結果を示したものである。結果をみると、「設けている」の割合は40.9%となっているのに対し、「設けていない」の割合は59.1%となっていることが確認できる。こうした結果からは、クラブ活動の成果を発表する機会を設けていない学校が比較的多いことが読み取れる。そうした学校では、活動を通して自身の成長を実感することができていない児童も少

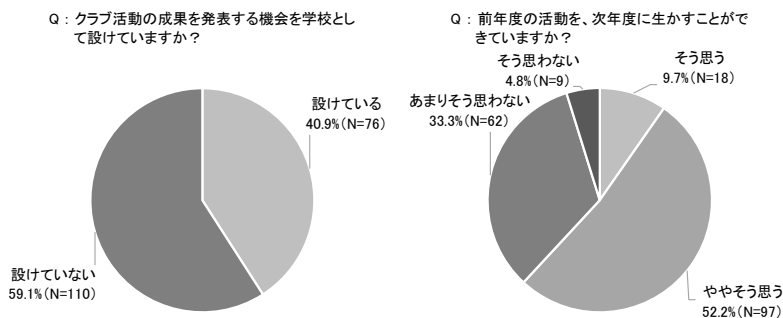


図7 成果の発表状況

図8 次年度への継続状況



なくないのではないだろうか。

こうした児童の「学び」を深めるための活動を展開するとともに、活動上の課題を継続的に考え、それを次年度に生かしていくことは必要不可欠だと考える。以下では、前年度の活動を次年度の活動に生かしているのかをみていきたい。図8は、「前年度の活動を、次年度に生かすことができますか？」という項目について、回答者に選択肢（そう思う、ややそう思う、あまりそう思わない、そう思わない）を設け、尋ねた結果を示したものである。結果をみると、肯定的な回答（「そう思う」と「ややそう思う」を合わせた回答）の割合が61.9%となっているのに対し、否定的な回答（「あまりそう思わない」と「そう思わない」を合わせた回答）の割合は38.1%となっていることが確認できる。こうした結果からは、前年度の活動を次年度に生かすことができている学校が比較的多いことが読み取れる。ただし、生かすことができていない学校も一定数存在していることには留意しておく必要があるだろう。なぜなら、そうした学校では、活動が年単位で終始しているため、活動上の課題が明らかになったとしても、それに対応することができていない可能性があるからである。

ところで、『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別活動編』（文部科学省 2018b）では、クラブ活動の目標を達成する上での学習過程が例示されている（図9参照）。最後に、そうしたものと実際の学校現場で行われている学習過程には、どの程度の乖離がみられるのかをみておきたい。

図10は、「現在学校で行われている学習過程とではどの程度乖離していますか？」という項目について、回答者に選択肢（乖離している、やや乖離している、あまり乖離していない、乖離していない）を設け、尋ねた結果を示したものである。結果をみると、乖離しているという回答（「乖離している」と「やや乖離している」を合わせた回答）の割合が41.4%となっているのに対し、乖離していないという回答（「あまり乖離していない」と「乖離していない」を合わせた回答）の割合は58.6%となっていることが確認できる。こうした結果からは、現在学校で行われている学習過程と文部科学省が提示している学習過程との間に乖離がみられない学校が比較的多いことが読み取れる。ただし、乖離がみられる学校も一定数存在していることには留意しておく必要があるだろう。そうした学校を少しでも減らしていくために、まずはどのような学校で乖離がみられるのかを明らかにする分析が必要だと考えられる。今後は、こうした基本的な分析を行うとともに、乖離がみられる学校において、具体的に「どこを」「どのように」改善すればよいのかについての考察を深めていきたい。

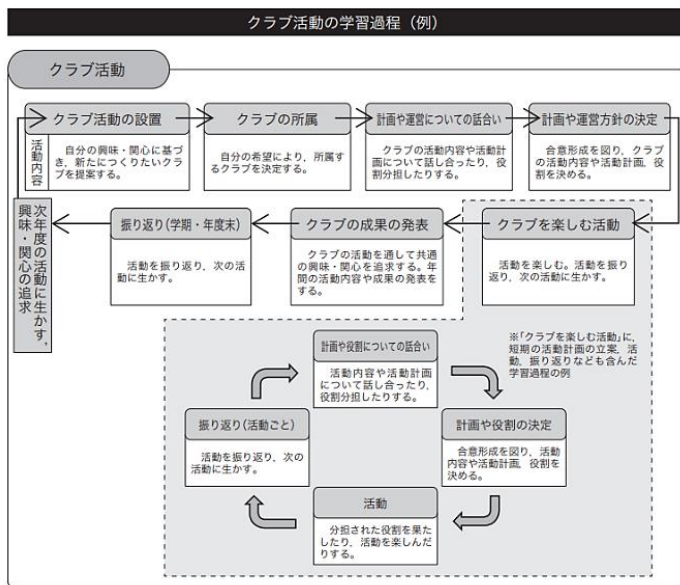


図9 文部科学省が例示した学習過程

出典：文部科学省（2018b）の104頁より転載

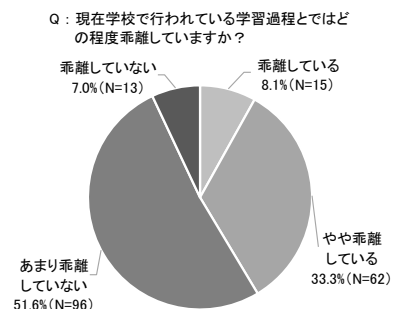


図10 学習過程の乖離状況

#### 4. クラブ活動における指導上の困難

続いて本章では、クラブ活動における指導上の困難についての検討を行いたい。アンケート調査では、「クラブ活動の指導において、最も困っていることを具体的に教えてください。」という自由記述欄を設け、回答者に尋ねている。本稿では、この自由記述のデータを用いて、クラブ活動を指導する上での困難を描き出すこととしたい。自由記述のデータを整理すると、「クラブ活動の年間実施回数の少なさ」「クラブ活動の準備の負担の大きさ」「教員の専門性がないクラブ活動の指導のしにくさ」といったものに関する困難が多くみられた。まずは、「クラブ活動の年間実施回数の少なさ」に関する困難をみていきたい。なお、以下の自由記述は、すべて原文ママで掲載している。

- ・授業時数が足りない。(30代・男性)
- ・回数が少なく、活動内容が充実していない。(50代・男性)
- ・クラブ活動自体は意義のあるものであり、もっと充実させられたらと思いますが、他の教育活動との兼ね合いで多くの時間を使えないところが課題だと思います。(40代・男性)
- ・児童主体のクラブ活動をしたいが、時数が足りないし学校の児童レベルによる。(30代・男性)
- ・回数が少ないため、創意工夫する時間が中々取れない。(30代・男性)

教員は、「授業時数が足りない」「回数が少ない」ことに困難を感じていることが読み取れる。授業時数が足りないことによって、「活動内容が充実」しなかったり、「創意工夫する時間」が取れなかったりすることもあるのだろう。また、授業時数が足りないという時間的制約がある中で行われる場合、児童が考える時間を十分に設けるのは難しく、「児童主体」ではなく教員主体のものにならざるを得ないのかもしれない。教員主体のクラブ活動では、児童が主体的に考え行動する力が身につくわけではないだろうか。

次に、「クラブ活動の準備の負担の大きさ」に関する困難をみていきたい。以下の自由記述は、それに該当するものである。

- ・準備が大変。(40代・女性)
- ・クラブの準備に時間がかかる。特に転勤になった最初の年や、違うクラブの担当になった年に負担を感じる。(30代・男性)
- ・科学クラブなので、児童が取り組みたいことの材料を準備するのに、時間・手間がかかる。(30代・男性)
- ・クラブの準備をするのに、時間がかかること。(40代・女性)
- ・クラブ活動に割く時間がないので、万全な準備ができない。(30代・女性)

教員は、「準備が大変」なこと、「準備に時間がかかる」ことに困難を抱えていることが読み取れる。実際、「転勤になった最初の年」や、従来担当していたものと「違うクラブの担当になった年」、例えば「材料を準備するのに、時間・手間がかかる」ような「科学クラブ」などで準備の負担を感じるようである。「万全な準備ができない」のは、既に多忙を極めている状況で負担の大きい「クラブ活動に割く時間がない」からだろう。

最後に、「教員の専門性がないクラブ活動の指導のしにくさ」に関する困難をみていきたい。以下の自由記述は、それに該当するものである。

- ・技能のないクラブを担当するとわからない。(30代・女性)
- ・教えられるスキルがない。(40代・女性)
- ・指導する専門的な知識や技術が足りていない。(60代・女性)
- ・自分の経験のない種目の担当になることも多いので、指導の方法に困ることが多い。(30代・男性)

・ 自分もあまりよくわかっていない競技での指導や審判はどうすればいいのかわからない。

(20代・女性)

教員は、「教えられるスキル」や「専門的な知識や技術」がないクラブを担当することに困難を抱えていることが読み取れる。特に「自分の経験のない」クラブを担当する場合、困難の程度が高くなることが想定される。実際、「よくわかっていない競技での指導や審判はどうすればいいのかわからない」状態にある教員も少なくないのではないだろうか<sup>5)</sup>。

以上のように、クラブ活動における指導上の困難としては、「クラブ活動の年間実施回数の少なさ」「クラブ活動の準備の負担の大きさ」「教員の専門性がないクラブ活動の指導のしにくさ」といったものがある。なお、回答数が少ないため、掲載していないものの「活動内容を考えることの難しさ」「外部人材との教育内容の共有の難しさ」<sup>6)</sup>などの困難があることも記しておきたい。

## 5. まとめと考察

本稿では、小学校教員を対象として実施したアンケート調査に基づき、クラブ活動における指導の実態について検討してきた。得られた主要な知見は、以下の五つである。

第一に、多くの小学校では、クラブの特質（児童が好きなことや興味のあることを念頭に計画を立て、異学年の児童とも協力し楽しみながら行うという特質）をふまえた活動が展開されていることが明らかになった。しかしながら、特質の中でも、児童が計画を立てて活動を行うという面で向上の余地があることも明らかになった。

第二に、クラブの設置に関する仕組みについては、児童が新たなクラブの設置を提案する仕組みがある学校が比較的多いことが明らかになった。しかしながら、そうした仕組みがない学校も一定数存在することも明らかになった。

第三に、クラブ活動の実実施計画・実施状況については、例えば年間活動計画を児童主体で立てている学校や、毎回の活動終わりに振り返りの時間を設けている学校が多いことが明らかになった。しかしながら、そうしたことを行っていない学校も一定数存在することも明らかになった。

第四に、クラブ活動の成果の発表状況については、発表する機会を設けていない学校が比較的多いことが明らかになった。

第五に、クラブ活動の指導上の困難として、「クラブ活動の年間実施回数の少なさ」「クラブ活動の準備の負担の大きさ」「教員の専門性がないクラブ活動の指導のしにくさ」といったものがあることが明らかになった。

これらの知見は、クラブ活動における指導の実態についての全体的な傾向を示したものである。もちろん、あくまで全体的な傾向を示したものに過ぎないものの、これまでそれすらも把握されてこなかったという状況においては、本研究で提示した知見には一定の意義があると考えられる。

最後に、そうした知見をもとに、クラブ活動における指導のあり方について考察することとしたい。第三の知見にもあるように、毎回の活動終わりに、振り返りの時間を設けていない学校も一定数存在する状況にある（図6（右）参照）。先述のように、設けていない学校では、その日の活動の「学び」を整理することができていないため、次回の活動においてどのようなことを意識し取り組む必要があるのかを認識できていない児童が一定数いる可能性がある。そうした児童を少しでも減らすためにも、振り返りの時間を設けることは重要である。また、振り返りを行うことで、児童は活動の改善点を見出すことができるだろうし、様々な気づきを得ることができるだろう。そうした様々な気づきを次回の活動に生かすことで、より「学び」のある活動にしていくことができると考える。そのように考えると、振り返りの時間を設けることは、全ての児童の「学び」を深めていくためにも重要だといえる。もちろん、各クラブの事情をふまえる必要はあるが、教員は毎回の活動終わりに、振り返りの時間を十分に確保することができるよう、活動時間をどのように配分するのかについての指導を丁寧に行う必要があるだろう。



また、第四の知見にもあるように、クラブ活動の成果を発表する機会を設けていない学校が比較的多い状況にある（図7参照）。先述のように、設けていない学校では、活動を通して自身の成長を実感することができていない児童が一定数いる可能性がある。そうした児童を少しでも減らすためにも、成果発表を行うことは重要である。なぜなら、児童がこれまで取り組んできた成果を発表し、自身の成長を実感することで、活動に対する意欲を高めることができるのではないかと考えるからである。成果を発表する機会の設け方としては、例えば学校行事として全校で成果発表を行うという方法が考えられる<sup>7)</sup>。クラブによって発表内容は異なるため、実演や展示などクラブごとに発表形態を決めなければならないという課題はあるが、そうした発表形態なども含めて、成果発表に向けた準備を児童同士で話し合っ決めて決めることで、児童は「皆で協力して作り上げる」ことを学ぶことができるし、児童の主体性や協調性も育むことができるのではないだろうか。そのように考えると、クラブ活動の成果を発表する機会を、どのような形態であれ設ける必要性は高いといえよう。

以上みてきたように、クラブ活動において、少なくとも振り返りの時間及び成果を発表する機会を設けることは重要だろう。そうした機会を設けていくことで、特別活動全体で掲げられている資質・能力の育成を着実に進めていくことができると考える。

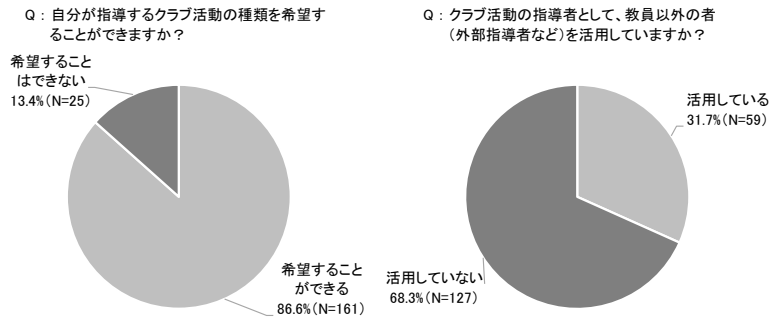
なお、本稿の分析には、クラブ活動における指導の実態を描き出す際に「学校規模」を考慮することができていないという問題がある。クラブ活動における指導の実態は、学校規模によって変わり得ると考えられる。今後は、学校規模を分析の視角とした検討を進めていきたい。そうした検討によって得られた知見もふまえて、クラブ活動における指導のあり方を再度考察することとしたい。

## 注

- 1) 本稿で取り上げるクラブ活動では、「同好の仲間で行う集団活動を通して興味・関心を追求することのよさや意義について理解するとともに、活動に必要なことを理解し活動の仕方を身に付けるようにする」「共通の興味・関心を追求する活動を楽しく豊かにするための課題を見だし、解決するために話し合い、合意形成を図ったり、意思決定したり、人間関係をよりよく形成したりすることができるようにする」「クラブ活動を通して身に付けたことを生かして、協力して目標を達成しようとしたり、現在や将来の生活に自分のよさや可能性を生かそうとしたりする態度を養う」（文部科学省 2018b、102-103 頁）といった資質・能力を育成することが望ましいとされている。
- 2) 例えば、樽木ほか（2017）では、学習指導要領の変遷を押さえた上で、小学校教員がクラブ活動の今日的課題に対してどのように対応してきたのかが検討されている。しかしながら、こうしたクラブ活動に関する先行研究では、本稿でアプローチする「実態」についての検討が十分になされていないことには留意しておく必要があるだろう。
- 3) 本来であれば学校単位のデータをもとに結果の解釈を行う必要があるが、本稿では便宜上、教員の回答を学校の回答とみなし、結果の解釈を行っている箇所があることを記しておきたい。
- 4) 「～5回」の割合は、図1では5.9%であったが、図2では11.3%となっており、月1回程度も実施する必要がないと考えている教員は必ずしも少なくないといえよう。
- 5) 参考図1は、「自分が指導するクラブ活動の種類を希望することができますか？」という項目について、回答者に選択肢（希望することができる、希望することはできない）を設け、尋ねた結果を示したものである。結果をみると、「希望することができる」の割合は86.6%となっているのに対し、「希望することはできない」の割合は13.4%となっていることが確認できる。希望することができない学校は1割程度ではあるものの、そうした学校の教員は、専門的な知識や技術が必要なクラブを担当することになる可能性がある。専門的な知識や技術が教員側にない場合には、クラブ活動の指導に困難を感じやすいのはいうまでもないだろう。
- 6) 参考図2は、「クラブ活動の指導者として、教員以外の者（外部指導者など）を活用していますか？」という項目について、回答者に選択肢（活用している、活用していない）を設け、尋ねた結果を示したものである。結果をみると、「活用している」の割合は31.7%となっているのに対し、

「活用していない」の割合は 68.3%となっていることが確認できる。活用していない学校が多いが、そこには「外部人材との教育内容の共有の難しさ」というものが関係している可能性があるのではないだろうか。

- 7) 学校行事として全校で成果発表を行うという方法以外にも、クラブ内で発表するという方法も考えられる。この方法だと、児童一人ひとりが成果をより具体的に発表できる時間を確保することができるだろうし、実現のハードルも比較的低いのではないだろうか。



参考図 1 指導の希望の有無

参考図 2 外部人材の活用状況

## 参考文献

- 文部科学省, 2018a, 『小学校学習指導要領 (平成 29 年告示)』 東洋館出版社.
- 文部科学省, 2018b, 『小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 特別活動編』 東洋館出版社.
- 文部科学省, 2023, 「令和 4 年度公立小・中学校等における教育課程の編成・実施状況調査 [調査結果]」  
[https://www.mext.go.jp/content/20230419-mxt\\_kyoiku02\\_000029047\\_02.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20230419-mxt_kyoiku02_000029047_02.pdf) (最終閲覧日: 2023 年 10 月 6 日) .
- 樽木靖夫・木村昭雄・高田麻美, 2017, 「学校現場におけるクラブ活動および部活動の課題と対応」『千葉大学教育学部研究紀要』 66 (1) , 27-34 頁.